

[解釈]

T・S・エリオットの学位請求論文 『F・H・ブラドリの哲学における 認識と経験』について（４）

今 村 温 之

今回は残された（４）を行い、これで一応最終回を迎える。頁数は T.S.Eliot, *Knowledge and Experience in the Philosophy of F.H.Bradley*, Faber and Faber, 1964.からのものである。

第四章 認識論者の認識論

- 1 第三章の結論：精神的対象の明確なる領域は心理学の分野としては確定できない。自然的は既に精神的に内包されているので、精神的世界から外的世界を抽出し構築できない。個人的 personal と对象的との区分は相対的変動的であり、内容や表象は一つの科学の対象ではなく、一つの対象の諸局面である

精神的対象の明確なる領域は心理学の分野としては現実存在しないということ、精神的と自然的とを区分する定義は何処にも見出だせないということ、外的は既に精神的に内包されているので精神的世界から外的世界をわれわれは如何なるときにも抽出し構築できないということ、こうしたことが第三章の結論であった。精神的と外的との、乃至は、アリグザンダの上手な表現では個人的 personal と对象的との、相違は実践的で便宜的な相違であり、あらゆる局面において変動する相違なのである。従って、内容や表象という言葉は一つの科学の対象を表すこ

とはないのであって、一つの対象の諸局面を表すのである。

P. 84.

- 2 認識論者の行なう区分には認識の絶対的妥当性があるかという問題・知識の起源の問題には充全たる「知識」の対象がない・知識の可能性の問題には、知識の充全たる対象がなく、対象は確固とした一つの実在として想定される

認識論者の取り扱う術語は心理学者の取り扱う術語よりも更に実体的であろうか。「内在的な」対象と「超越的な」対象に関する様々な区分、「実在的な」対象と「非実在的な」対象という術語、「先験的」知識と「後験的」知識、「現象」と「実在」、「受動的把握」と「意識の活動」。これらは総て「実践的知識において」ある種の意義を持っている術語なのである。しかし「理論的には」、思考とは実践的妥当性を越えているのか、思考が到達する何らかの実在があるのか、思考はその実在に到達するのか、といった認識の絶対的妥当性に関する問題が認識論的問題なのである。認識の絶対的妥当性の問題に関しては、明らかに三つの区分がある。知識の起源の問題（認識の成長の問題）、知識の構造の問題（知る者と知られるものとの関係）、知識の可能性の問題（認識は真実在を知り得るか）の三者である。これらの中で唯一実在に関する問題は知識の構造に関する問題である。何故なら、知識の起源の問題は充全たる「知識」の対象を取り扱っていないからであり、知識の可能性の問題には知識の充全たる「対象」が全く存在しないからである。知識の充全たる「対象」が全く存在しないときには、対象は確固とした一つの実在として想定されるのである。

Pp. 84-5.

- 3 「認識の成長」は「認識の本質」に関する解答を与えない・ヨーロッパ人

の世界認識は野蛮人のそれよりもすぐれているといった漠然たる前提においてのみ、認識の成長は認めうる・この前提がなければ、認識の成長とは有機体の環境に対する適応の歴史に過ぎない

本章は知識の可能性の問題が要求する事柄（認識は何処まで真実在を知り得るかということ）に関する検討を企てるものである。従ってエリオットは、「認識の成長」の問題に関して簡単に考察する。この問題は認識論において最優先されねばならぬ問題ではない。理由は次の如くである。人間が所有する世界認識は猿のものよりも優れ、ヨーロッパ人の世界認識は野蛮人のものよりも優れていると誰もが認めるが、この種の認識には「発生論的」研究の結果こしらえられた理論でなければ解決されないような「ともかく」式のものが取り残されてしまうのである。われわれの考える歴史の中には成長が認識されるのであるが、その成長とは世界に関する曖昧な乃至は実践的な意味合いにおいてだけの「認識」の成長なのである。子供の成長や発展には、外への拡大と内への内容の精緻化を伴う、諸価値の体系的変動が存在するが、われわれはこの変動はわれわれ自身の経験の諸価値や内容と連続していることに気付くのである。しかし、知識が既に想定されている場合にだけ、こうした変動は認識の成長と言えるのである。そして、もしわれわれ自身の認識の妥当性に関してわれわれが何ら想定を行なわないならば、われわれがその跡を辿る成長は認識の成長では全くなく、環境に対する適応の歴史以外の何物でもないのである。更に、こうした説明にあっては、有機体が適応するとわれわれが想像する環境に関するわれわれの知識は絶対的ではなく相対的と見做されねばならない。つまり、諸関係の体系が知識であるとされるようなレベルでわれわれの実践的認識が歪められないような諸関係の体系のみをわれわれは想定するということである。従ってこれ迄のところ、認識の本質に関しては何物も知られていないのである。

- 4 生理学は、認識が想定され、認識が溶け込んでゆく、背景を与える・認識を説明する最終段階では、想定された認識と認識の条件とが相互に説明しあうことになる・生理学は知識としての知識ではない、ある外面下の知識を説明する・「知ること」と「知られるもの」とは異なる・認識論とは「知ること」が「知られるもの」になることからなる・「知ること」を対象とするときには、その外面は他の諸外面に連続している・われわれにとっての究極的実在とは「志向される対象」、諸外面下の「知ること」である・純粹に「知ること」の外面下にある限り、問題は何も生じない・認識論の問題は「知ること」が他の諸外面との関係において生じる

既に理解したように、構成心理学の基礎は生理学へと溶け込んでいる。生理学は認識の問題の解決に不適切では決してないが、それには常に限界がある。「何」かが知られるのであるが、生理学はそうした認識の限界について考えてみるように示唆したり、真偽に関する幾つかの条件を与えることが出来るに過ぎない。生理学は、認識が想定され、認識が溶け込んで行く傾向のある、背景をわれわれに与えてくれるのである。従って、われわれが所有しているとわれわれが考える知識と、その知識の諸条件との双方が、認識の説明の最終段階では互いを説明し完成する為に、必要であろうとわれわれは確信せざるを得ないのである。

しかし、生理学は、知識としての知識ではない、ある他の局面下の知識に関する説明を行なうのである。われわれが最終的で完璧な知識を全く所有していない限り、これらの局面の研究は認識論にとって相応しいものとして残るであろう。

「志向される対象」が（実践的領域に住まう）われわれにとっての究極的実在なのである。

しかし、「知ること」をわれわれが（対象として）経験している状態での「知ること」においては、「知ること」という局面は他の諸局面と連続しており、如何なる点においてもそれらの局面から如何なるときにも完全に分離してはいないのである。「知ること」が純粹に「知ること」である限り、解決せねばならぬ問題は何もないのである。万一解決せねばならぬ問題があるとすれば（エリオットはその

ようなものはないとも思っている), その問題は「知ること」が他の諸局面に対して持っている関係によって生じるのである。従って, 認識論とは, 最初のうちは認識であるものが他の一局面へと吸収されて行く純粹なる行程なのである。つまり, 「知ること」が「知られるもの」へと, 活動が対象へと, 変化するのである。この行程は無限に繰り返され得るのである。

Pp. 85-6.

- 5 認識論の問題点：知識の構造の問題と知識の妥当性の問題との区別・前者においては, 知識の存在が想定され, そうした存在の条件が調べられるが, 後者においては, そうした想定はなく, 知識の可能性が調べられる・前者においては, 「認識する者」と「認識されるもの」との関係が記述され, 実在の度合いに変化が無い為, 記述後もその記述を通して元の経験を認識可能である・後者においては, 最初から確固たる一つの実在しかないから, 実在の度合いを持った元の経験が認識できないような術語でもって語られる

認識論は認識の問題を無条件の前提においてあつかうという点で, 心理学, 生
理学, 論理学, 生物学といった個別科学とは異なった地位を占める。それは科学的確かさと形而上学的究極性の双方を要求するのである。しかし科学者は認識論者の外的諸基準は自分には関係ないと抗議する。形而上学者は, 認識論者は体系の構築に従事するが, 認識の完全に内的な局面が消失するような外的視点に彼は立たざるを得ないと, 非難するのである。例えば, ブラドリのような形而上学体系においては, そこで使用されている術語が認識論に必要とされる実体性を有していない為に, 知識論が入り込む余地はないのである。

以上のような問題には, 二つの局面がある。二つの局面はよく混同される。①「われわれ」が認識している対象や真理に関する知識の問題, ②知識一般に関する問題, の二者である。①においては, 「われわれ」は知識の現実存在を想定し,

その条件を調べるのである。②においては、「われわれ」は何も想定せずに、知識の可能性を調べるのである。これら知識の現実存在の問題と知識の可能性は完全に別個に扱われることはないが、これらは別個の問題なのである。

認識論においては、「われわれ」は「知る者」と「知られるもの」との関係性を記述しようとする。つまり、「知る者」と「知られるもの」を「われわれ」が見出だすがままの状態にしておくような記述を、「われわれ」は行なおうとするのである。つまり、記述の後でも猶も認識可能な経験を記述しようとするのである。

ところが、「われわれ」は認識論的経験の妥当性と意味という非常に異なった問題に関しても問いを立てるのである。ところが、この問題は元の経験が認識出来なくなるような術語で以てのみ答えられ得るのである。

Pp. 86-7

6 認識構造の記述の問題と認識経験の妥当性と意味の問題との何れかに解答する者は二元論的实在論者ないしは批判論者となる・例えばカントである

ここでエリオットはカントのことを指しながら、「知る者と知られるものとの関係の記述の問題」と「認識論的経験の妥当性と意味の問題」との何れかの問題に解答を試みようとする哲学者は二元論的实在論者となるか、「批判論者」（究極的には同じものである）となるかの何れかである、と述べる。

カントは一種類ないしはせいぜい二種類の実在からなる、ある実在世界があると想定するのである。実在の度合いを無視した、このような截然とした独断的な区分の結果、彼は非実在的对象や想像的对象という難問や誤謬という問題を抱え込んでしまうのである。

エリオットは、ブラドリの『現象と実在』の視点から、こうした度合いを持たない実在世界に対する批判を行なうつもりであり、マイノング *Meinong* やメッサー *Messer* の行なった認識行為に対する分析を批判することにより、こうした実在世界を更に解明するつもりである、と述べるのである。

- 7 認識論には、「我々が知ること」と「知られるもの」との間には記述可能な関係があるとする立場と、外的世界はあるがままに表象され、常に所与に等しいとする形而上学的立場とがある・形而上学的立場はあらゆる不一致を等しく実在と見做すこととなり、「世界」と呼べる実在世界が存在しなくなる・すると、我々は我々の認識から独立した一つの実在世界があると想定し、意識を主観性という外皮で覆い、実在がどのようにしてこの外皮を通過するかという形で、つまり表象と実在とは異なるという形で、認識を考えるようになる・以上のように何れの立場も実在世界と現象世界との二元論へと至る

認識論には、外的世界は常にあるがままに表象されるのであり、常に所与に等しいとする形而上学的立場と、「われわれが知ること」と「知られるもの」との間には記述可能な関係があるとする立場との、二通りの立場が存在するのである。前者の立場をわれわれが取らなければ、あらゆる不調和と不一致とが何れも等しく実在的となり、如何なる本来の意味合いにおいても、それらが一つの「世界」を構成することがないのであるから、実在的世界がわれわれには全く残されることがないのである。

すると、われわれはわれわれの認識から独立した一つの実在的世界があると想定し、意識を「主観性」という不透明のヴェイルで蔽い、実在がどのような形でそしてどのような方法でこの外被を通過するのかと尋ねようとするのである。つまり、われわれは対象を表象された状態でのみ熟知していると想定するのであるが、認識論者は「知識」と「純粹に知られているのではない知識の対象」との間にはある関係があるということを証明することを彼の課題とするのである。

以上のように、何れの立場も結局は実在世界と現象世界との二元論に通じているのである。

- 8 例えばラッセルの場合、実在と現象の分離に並んで内在的と超越的、内容と対象の区文がなされるが、実践的な区分を求める視点と区分された実在、超越的、対象に形而上学的な実在を求める視点とが混同されており、これらの区分は究極的には無意味である・これらは二元論的に分裂している

ここでエリオットは、実在と現象との二元論に基づく知識の区分の実例として、ラッセルの五つの知識理論の区分 (*Mind*, 1904. 'Meinong's Theory of Complexes and Assump-tions, III') を紹介する。

- 1 知識は知られるものと異なるものとするもの。
- 2 我々は内容と対象の区分を認めようが、対象は純粹に内在的とするもの。
- 3 偽なる対象のときは対象は内在的であり、真なる対象のときは対象は超越的であるとするもの。
- 4 判断が偽のときは対象は全く存在せず、判断が真のときは超越的对象が存在するとするもの。
- 5 対象は常に超越的であるとするもの。

これらにあつては、現象と実在との二元論に並んで、内在的と超越的との区分や内容と対象との区分がある。無論ラッセルは超越的对象としての実在を擁護する。

ラッセルは1を観念論に帰属せしめるが、エリオットは彼が如何なる観念論を表示しているのか解らないと述べる。更に、これらは何れも実践的視点と形而上学的視点が混同している為に、何れの説明も究極的には無意味であるとエリオットは述べる。又、2～5は内容と対象の区分を認めているが、この区分は如何なる根拠に基づくのか解らない恣意的区分であるとエリオットは述べる。

「例えば[赤さ]といったような単一なあるものの表象について考えるときは、表象と対象とは異なっていることは明白である (Russell, *ibid.*, p.514)」ということであるが、赤い感覚とは赤い何物かについての感覚なのであり、「赤さ」とは表象であるというのは完全には正しくないのであった(第三章)。しかも、対象と表象の区分を正当化する如何なる根拠も「私」は見出だせないのである。しかし、ラッセルは (Russell, *ibid.*, p.207.) 「表象が現実存在するときには表象の内容が現実存在するのである。しかし、対象は現実存在する必要がない。つまり、対象は自己矛盾の物かもしれない。黄金の山のように、たまたま事実ではないものかもしれない。等しさのように、現実存在することが本質的に不可能な物かもしれない。自然的ではなく心理的なものかもしれない。現実存在したか、現実存在するであろうか、現在は現実存在しない物かもしれない。表象の中に対象が現実存在するかもしれないと言われようが、それは現実には現実存在では全くない。それは擬似現実存在と呼ばれましょう。……内容は対象のために無視される傾向がある。内容の自然な名称は全くない。内容はその対象によって名付けられ区別されねばならないのである」と述べるのである。内容と対象は本来一体のはずが、ラッセルにあっては分離しているのである。

Pp. 87-8.

- 9 二元論的实在論の仮定すること：実在的で孤立した諸対象からなる世界が存在する。対象の把握は自然な対象の把握である。「観念的」諸対象も自然な対象と同様に把握する。対象が現前しないときにもわれわれは対象を表示し得る。典型的対象は孤立して存在し自存しない

以上の如き内容と対象の理論は、実在的で独立した諸対象からなる世界があるという想定に基づいているのである。その想定は、把握の典型的なケースは自然な対象を把握する場合であるとの仮定に立っているのである。その想定は、「観念的」諸対象の把握の仕方を同一の鑄型に押し込んでしまうのである。そしてその

結果、対象が全く現前しないときに、われわれは対象を表示しようというパラドクスに、その想定は至るのである。又、その想定は、典型的な対象は孤立して現実存在するということを仮定し、ある程度は自存する *subsist* ことすらないかのように仮定しているように見える。

Pp. 88-9.

- 10 実在と現象、内在的と超越的、内容と対象といったラッセルの挙げた区分が、実践的区分であり得るような「実在世界」がある・この実在世界は認識論や(形而上学の体系内では否定されるが)形而上学の前提となり得る・この実在世界の実在性は度合いを持っている・その実在性は均一の実在性ではない・実践世界においては実在性に度合いがあるが、われわれはその都度どうしても実在の対象と非実在の対象を必要とする・洗練された実践においてのみ、実在の度合い説は有効である・限定経験の世界は選択と強調を内包し、実践の世界は時々に関心と価値評価によって維持される・実践世界の定式化できない無矛盾性の中に、社会的、科学的諸体系が成立する

前章において提供された心理学的説明によれば、例えば「黄金の山」は他の如何なるものとも同程度に実在的であり対象的であった。このような場合、もし「黄金の山」が孤立した内容であるとするならば、内容が対象となってしまうであろう。ところがこの場合、当然のことながら、われわれは内容を対象と取り違えるというわれわれの誤謬を説明せざるを得なくなるのである。

しかし、「黄金の山」が対象であろうと志向していないならば、それは内容ですらあり得ないであろう。「黄金の山」という観念が実在の観念である限り、それは実在の対象なのである。

対象を内在的としたり超越的としたりする先のラッセルの四つの理論のそれぞれがその存在に気付いていないある「実在世界」があるのである。即ち、それら

四つの理論の総てによって志向された実在的世界に略等しい、ブラドリの言う実在(Reality の方)と同一でも無ければ両立しなくもない実在世界(a real world)があるのである。要するに、本質的に定義不能なものを、つまり、こうした実在世界が何であるかを、示そうとエリオットは今つとめているのである。つまり、何故この実在世界は認識論の出発点として想定されることが多いのか、従って、この実在世界は形而上学的体系の中では非実在的であるのに、何故あらゆる形而上学的体系によって前提されているのか、ということを示そうしているのである。

あらゆる対象は実在的であるとするアリグザンダやナン博士(Dr Nunn)の見解にエリオットは同意する。尤も、彼らのように動能と対象を区別し、対象に均一の実在性を与えることが正しいとはエリオットは思わないはずではある。

つまり、彼らの見解は実践的にはどうしようもない程に真ではないのである。われわれは実在的な諸対象もあれば完全に非実在的な諸対象もあるというふうに想定せざるを得ないのである。洗練された実践においてのみ、われわれは実在の度合いを何らかの程度に効用があると知るのであり、われわれは曖昧な「実在的」と「非-実在的」を完全に無くしてやって行くことは不可能なのである。何故なら、否定の要素がない場合と同様に、非実在がなければ、「あなた」は限定経験の世界を全く経験しえないからである。限定経験の世界は選択と強調を内包しているのであり、実践の世界は関心と価値評価とによって維持されているのである。しかし、われわれの関心とわれわれの価値評価とは一瞬一瞬局面毎に変わるのである。たまたまわれわれの注意の焦点となる実在世界の断片に応じて、実在世界も変わるのである。実践的実在という背景を背にして、社会的且つ科学的な種々の体系が存在するのであり、これらの諸体系は定式化できない無矛盾性の中で共生しているのである。

Pp. 89.

- 11 実践的世界の構築における二局面：実在的経験の選択（非実在的経験の除外）、及び、実在世界の想定（選択基準の設定）・実践的世界の外在性は以

上のように二重に維持されているから、個人的 personal 内容と対象的 objective 内容の区分は最初から区別されている二種類の対象の区分ではなく、差異への実践的関心の視点を維持する限りにおいて有効な区分である・差異への実践的関心はその都度変化するのであるから、矛盾一杯の実践的世界がある・矛盾一杯の実践的世界をわれわれが有機的に統一しようとするのが完全な有機的統一世界をわれわれに信じさせる・その絶対的秩序世界を如何にどの程度認識しうるかが問題となる

こうした洗練された実践世界が構築される過程には二つの局面がある。一つの局面は、ある諸経験を実在として選択し、他の諸経験を除外するということが世界を建設するということであり、他の局面は、一つの実在世界を想定するということがそうした選択の基準を与えるということである。外在的世界は以上の如くその外在性において二重に支えられているのである。従って、純粹に個人的な内容と対象的な物との区別は必ずしも二つのクラスの対象を区別したものではないのであり、差異への実践的関心の視点という一つの視点をわれわれが維持する限りにおいて有効な区別なのである。ある意味合いでは、矛盾で一杯の実在世界があるのであり、こうした世界を有機的に統一しようとのわれわれの試みが、われわれが更に進んで一つの現実として取り扱う一つの仮説たる完全に有機的に統一された世界を信じさせるのである。そしてここから、この絶対的秩序を持ったこの世界にどの様にして、又、どの程度われわれが接触するようになるか、という認識の可能性の問題が生じるのである。

P. 90.

- 12 内在的对象と超越的对象に関する原理は、(諸視点によって)志向される実在性はそれ自体においては現実的である必要はなく、その現実性は(諸視点の)志向の実在性において前提されているということである・志向される実在世界は有限の諸視点を通して志向されてのみ、形而上学的実在性を

得る・対象的世界は一つの視点においてのみ現実的であるが、一つの視点は個人的ではない一つの世界 the world one and impersonal を志向する・一つの視点から見える対象的世界においては実在性が与えられ、非個人的一つの世界においては実在が記号指示される・この二重局面において内在的对象と超越的对象が区分されるが、この区分は実践的有效性しか持たない・内容と対象との区分や内在的と超越的との区分は二種類の対象を区分したものではなく、ある内容が実在的と既に想定されたところでのみ有効である・想定が無いところでは、あらゆる対象は等しく内在的であり等しく超越的である・対象の実在性の基準は、主観と対象との関係にあるのではなく、志向された世界の中で対象が持っている諸関係にある・これらの諸関係とは対象に接している諸視点である・これらの諸関係は諸外面を表示の単一点へと関係付ける・この関係付けの過程において、始めは純粹で単一の対象であったものが一つの外面に支配された対象へと変化する・一つの視点と人間の一つの意識とは必ずしも同一ではない・我々が別の関係でもって対象を決定するときは、我々は視点から視点へと移動すると言える・視点から視点への移動は一つの意識内の運動と変わらず、多くの諸外面を観念的に表示することによって一つの実在世界が構成される

内在的对象と超越的对象の問題に深く係わっている原理は次のようである。つまり、志向される実在 a reality intended の方は、それ自体においては、現実的 actual である必要はないのであって、その現実性 actuality は、志向の実在性 the reality of the intention の方において前提されているということなのである。

われわれは、われわれの様々な有限の視点から、単一の実在世界を志向するのであるが、この実在世界は、これらの諸視点を通して実現 realization を図る限りにおいてのみ、形而上学的に実在的なのである。

もう一度述べるが、対象的世界は、何らか一つの視点においてのみ、現実的 actual なのであるが、各々の視点は、一つの視点ではなく個人的ではない一つの世界 one

and impersonal world であろうと志向するのである。一方においては、実在が与えられ、他方においては、実在が単に記号指示されるという二重局面があるのである。この二重局面において、対象の超越とか内容と対象の区別の正当化が見出されるのである。しかし、こうした区分は単に実践的に有効なだけであり、ある特殊な内容が実在として既に選択されていない所では有効ではないのである。対象としての対象の中に見出だし得る何らかの特質によって、ある対象は内在的であり、他の対象は超越的であるというのは真ではない。何故なら、あらゆる対象は等しく内在的であり、且つ、等しく超越的だからである。

従って、実在の基準は、対象の主観に対する関係の中にあるのではなく、対象が「志向された世界 the intended world」へと関係し得る直接性の中にあるのである。何故なら、われわれはわれわれの対象を常に実在の同一領域へと帰属させるとは限らないからである。従って、対象の実在性は対象自体にあるのではなく、対象がそれ自体を特に欺くことなく所有している諸関係の広がりの中にあるのである。これらの諸関係は対象に接している総ての諸視点のことである。つまり、これらの諸関係は様々の諸局面を表示の単一点へと関係付けるのである。つまり、この関係付けの過程において、対象それ自体が変化するのである。何故なら、始めのうちは純粹で単一の対象であったものが一つの局面に支配された対象へと変化するからである。しかも、一つの視点（主観）は一つの人間の意識（対象）と同一である必要はなく、われわれがある対象を別の関係で決定するときには、われわれが一つの視点から別の視点へと移動すると言い得るのである（意識を中心として対象を決定するのでなく、主観と対象の相互連関において対象を決定する）。これが真であるならば、一つの「限定中心」から別の限定中心への移動は、一つの意識の中の運動と、種類において変らないであろうし（内的には移動するが外的には一つであり連続的一体性がある）、多くの諸局面の観念表示によって一つの実在世界を構成することになるであろう。

Pp. 90-1.

- 13 形而上学的実在と区分される認識論的実在世界は不定数の諸視点の同一表示からなる本質的に不定の世界である・そうした実在世界は、われわれが同一表示を確立しうる総ての限定中心へと拡大しうる・エリオットが考える同一表示を持つ観念（実在の述語）とマイノングの観念との違い：マイノングは「対象（存在）」と「表象としての対象（疑似存在）」と「表象の内容（不可欠構成要素）」とを別種の存在者として区別する。「表象としての対象」と「表象の内容」との区別は、エリオットから観れば真の区分ではない。何故なら、両者とも本来の観念ではなく、「対象」と同じであるからだ。それらの観念性は心理学的観念であり、精神的コンテクストにおける対象の外面に他ならない

以上のような場合、形而上学的実在 Reality と区分される認識論的「実在世界」は、不定数の諸視点の同一表示からなる本質的に不定な世界であろう。特に、われわれが接触するようになる教養のある大人達の諸視点の同一表示からなる不定な世界であろう。しかし、そのような認識論的「実在世界」は、われわれが同一表示を確立しうる総ての限定中心へと拡大して行くことが可能なのである。

以上のような観点と、これ迄に行なってきた観念に関する説明とに従えば、マイノングが行なう幾つもの区分は「私（エリオット）」にとっては手はこんでいるが余分なものに思える。「私（エリオット）」は現実存在している対象ではないとされる疑似現実存在している対象（黄金の山、丸い四角）とその内容との区分を例に取りたい。

対象（例えば固くて延長を持ったもの）を表象の中にのみ現実存在するものとして語ることは意味がない（表象はそうした性質を持ちえない）、とマイノングは述べる。「[私の表象の中]にのみ現実存在する[対象]とは全く現実存在しえない。……さて、われわれは次のように要約し得る。[表象の中に現実存在する対象]という見地から観た場合の現実存在とは、認識者にとっては、疑似現実存在なのである。そうしたものは、このような場合に現実に現実存在するものを確立せんが為のみ存続しているのである。この現実に現実存在するものとはそうした理

由から厳密な意味合いにおいて知覚されているのである」。われわれは表象としての対象と表象の内容とをはっきりと区別せねばならないのである、とマイノングは語る。「もし私が先ず赤について思い、次に緑について思うとするならば、当然それは同じないし全く同類の表象ではあり得ない。何故なら、それによって、私は先ず一方の対象を把握し、次に他方の対象を把握するからである。しかし、これら二つの表象をそれぞれに区分するものは、つまり、最初の表象を一方の対象に割り当て、二番目の表象を他方の対象に割り当てるものは、それらの内容なのである。なる程、表象の中で把握される対象は、現実存在することが可能であるはずがない。だがしかし、それによって対象が把握されるところの内容は、益々現実存在するはずがないのである。内容とは表象の構成要素であり、欠如しているはずがないのである。欠如しているならば、表象自体も亦欠如しているであろう」。

ここでは、表象という言葉の使用法に、色々なことが依存しているのである。しかし、ここでは、表象という曖昧な言葉の意味が定義されていないのであり、しかも新しい定義や修正された定義が必要とされているのに、定義されていないのである。

二番目の引用の中では、(赤と緑の)表象の違いとは対象の違い以外の如何なるものであろうか。又、内容についても同様のことが言えるのである。この引用か所においては、表象と内容の両者は対象と同じように考えられているようである。この引用か所での「観念」は論理的観念、即ち、われわれが実在の属性であると断言する観念、ではないのである。このか所における観念は、マイノングにとっては、対象と同じように取れる観念であり、観念と対象とは実在性の度合いが同じであろう。彼は実在性の同レベルで、対象と観念を区別しようとしているようである。何故なら、赤い表象を実在の赤いものの属性として断言するという問題がここには全く存在しないからである。このか所の観念は心理学者の観念であり、心理学者にとっては、精神的コンテクストにおける対象の局面なのである。ある個別科学の為にこの局面を切断することに対して、エリオットは既に抗議したのであるが、観念を対象と実在的に同じように考え枯らしてしまった後で、そ

の観念に類するものを再度移植する根拠はないのである。

二つの観念（赤と緑）があるときには、それと同時に二つの対象は存在しない。何故なら、われわれは二つの対象の代りに二つの表象を代用したからである。ところが、更にそこより観念の「内容」について語るとするならば、更に間接的に対象の代用をしているのである。

観念は（それとは別の）対象を持っているのではなかった。何故なら観念は対象への表示なのである（表示を持っているのである）からだ。観念が実在的である限り、観念とは対象なのであり、それが非実在的である限り、対象も非実在的であるか非決定的なのである。

Pp. 91-3.

- 14 マイノングの非実在の対象の場合の「表象としての対象（疑似存在）」と「表象の内容（不可欠構成要素）」の区分、「表出された言葉」と「言葉によって意味された表象の中の対象」の区分、「観念」と「観念の内容」の区分は「表出」と「意味」の区分に基づくとされる。しかし、もし「意味された表象の中の対象」が「観念の内容」であるならば、聞き手の視点から両者を等しく考えており、観念の内容を話し手の視点から考えていない。聞き手によって把握された対象は話し手にとっては存在しない。観念とは半対象である。表出に意味がないならば表出は表出ではない。意味は観想されるのではなく体験（経験）されねばならない。表出と意味とは截然と区分別出来ない。マイノングの表出と意味との区分は彼の観念と観念内容の区分の根拠とは成り得ない。疑似存在の対象ですら超越的であらねばならない。

観念と観念の内容との区分はマイノングの表出 Ausdruck と意味 Bedeutung とに対する分析との関連で説明しうるかもしれない。「[太陽] という言葉を口に
する者は通常、……彼の中に知覚にせよ想像にせよある種の表象が生じていると

いう事実を表出しているのである。この表象の本質はその表象の中に示されている物、即ち、表象の中の対象、によって先ず決定されるのである。そして、この表象の中の対象は実は「太陽」という言葉によって意味されているものなのである*」。

この引用か所から解ることは、われわれは観念を表出するが、(観念内容たる)対象を意味するという風に二者を区分することであろう。このことを認めるにせよ、非一実在の対象の場合に、表象の中の対象が、完全に観念の内容であるのか否かを尋ねてみることは理に適ったことである。表象の中の対象と観念の内容とが完全に同一ならば、話者の視点と聞き手の視点を同じ視点のように取り扱うという心理学者の誤謬をわれわれは犯しているのである。こうした観念は、聞き手によってなされた判断だけを表示しており、その結果、話者は聞き手の数だけある諸対象の「一つの観念」を持っているに違いないということになるのである。

ところが、聞き手によって把握された対象は、話者の視点からは現実存在しないのである。話し手は意味のみしうるのである。たとえ彼が彼自身の「精神状態」を意味するとしても、実際に現実的なものは意味されていない方の(意味する方の)意味なのである。更に、把握された観念とは半一対象に他ならないのである。即ち、観念は対象としては、われわれ自身を話し手の場に半分置き、話し手を対象として半分観想するところによってのみ、現実存在するのである。

従って、表出 *Ausdruck* と意味 *Bedeutung* との区分を余りにも厳密に引いてはならないのである。つまり、マイノングのように、観念と観念内容とは、表象と表象の中の対象とは、厳密に区分され得ないのである。何故なら、如何なる表出も、意味がその表出にないならば、表出ですらないのである。意味は観想され得るのでなく、体験され *erlebt* ねばならないのである。こうしたところから、誤謬の場合でさえ、つまり、擬似現実存在の場合でさえ、その対象は超越せねばならないのである。さもなければ、対象は全く存在しないであろう。

- 15 内在的对象と超越的对象を区分する根拠は誤謬にある・対象は対象を超越する関係を持つ・対象の諸関係が乏しい対象は対象ではない・関係を全く持たない対象は孤立した純粋に想像的对象である・それは対象とは別の諸関係を持つ感情である・ラッセルは表裏一体の関係にある存在(内在：～である)と現実存在(超越：～がある)との区別を叙叙に拡大して行くことにより、対象の超越に形式的価値のみを与え、超越から意味を取り払ってしまう・その結果、真理、判断、対象の実在性の基準が無くなってしま

内在的对象と超越的对象を区分する根拠は誤謬の事実である。内在が偽であり超越が真なのである。如何なる対象も純粋に内在的ではない。何故なら、対象が対象である限り、対象は対象を超越する(知覚を超越する)諸関係を、即ち、対象を構成するが究極的には対象を変形し吸収する諸関係を持つであろうからだ。対象の諸関係が乏しければ乏しい程、対象は対象でなくなるのである。そして擬似現実存在の限界事例は関係を全く持たない対象なのであり、これは孤立した純粋に想像的な対象のことであろう。これは全く対象ではなく、それ自体としては対象とは別種の諸関係を持つ感情 a feeling のことなのである。

ラッセルは、あらゆる対象は超越的であると主張する。この点に関しては、エリオットの見解はラッセルに一致するのであるが、二人の主張する超越は異なるのである。Mind XIIIの Meinong's Theory of Complexes and Assumptions (III)の中でラッセルは「対象が現実存在せねば exist ならないと主張されているのではない。そう主張することは、ある特称命題が対象に関して有効であらねばならないということを主張することであろう。ところが、本質的に思える唯一のことは、斯く斯くである対象がある be という事なのである。たとい分析的ではないにせよ、存在すること being の主張は、他の如何なる主張よりも猶一層殆ど本質的なのである。」と述べる。内容は対象と内容の対象への関係とを内包しているともラッセルは述べる。ラッセルのこれらの主張は、一見したところ、エリオットの先程の一般原理に非常に似ているように見えるのである。つまり、「志向される実在はそれ自体では現実的である必要はない。しかし、その実在

性は志向の実在性に前提されているのである。」という原理に似ているのである。しかし、ラッセルの主張は、現実存在 *existence* と存在 *being* との区別を徐々に拡大して行くことによって、対象の超越に形式的な価値のみを与えるのである。こうした区別の結果、マイノングが内在性でもって意味していないのと同様に、ラッセルもまた超越でもって意味する *mean* ことがないのである。

この結果、われわれには真理や判断や対象の実在性の基準が無くなってしまふのである。

Pp. 94-5.

- 16 マイノングの上位者と下位者（観念的对象と実在的对象）の区分・如何なる対象も実践的には上位であったり下位であったりし得る・メロディとその構成要素である諸音の場合、上位者も下位者も同じ「時間へと配分された対象」であり、下位者も亦上位者と下位者に分割される・上位者の下位者に対する関係は「何」として表せないものである・諸項間の関係は対象として扱えない、諸構成要素に適切に関係づけられた関係である・複合体の中には統合的關係と全体との二つの上位者がある・上位者と下位者との区分はわれわれが実践的に出会う対象に通用しない

マイノングの知覚に関する理論は、観念的对象（高秩序の対象）と実在の対象（低秩序）とを区分する混み入ったものとなっている。即ち、彼は *superiora*（上部者）と *inferiora*（下部者）とを区分するのである。ところがラッセルは上部者を諸関係（類似、差異、関係によって関係づけられた諸項から成る複合体）や 0 と 1 以外の数字が主張され得るような諸対象として考えている。

ところが、如何なる対象も実質的には下位であったり上位であったりすることが可能に思えるのである。例えばメロディーの場合、上部者としてのそれは下部者としての諸音から成るのであるが、その単一音はやはり音響振動から成っているのであり、その単一音はメロディーと同じく絶対に「時間へと配分された対象」

なのである。

さらに、上位者のその下位者に対する関係が何であるのかは決して明白ではないのである。メロディーは五分音符ではないのである。それに付け加えられているものは関係なのであるが、その諸構成要素に「適切に関係付けられた」関係なのである。

こうした諸項間の関係が、対象が把握されるのと同様に、対象として把握されるのであろうか。また、複合体の中には、二つの上部者が、即ち、統一する関係と複合体の全体とが無いのであろうか。さらに、こうした区分は、われわれが現実接触到するようになる対象に実際に対応一致するのであろうか。こうした疑問が上部者と下部者との区分に対して生じてくるのである。

P. 95.

- 17 マイノングにあっては、観念的对象は明確な前景に置かれ、実在的对象は物自体的な不明瞭な後景に置かれる・外見に現われた特性の総体は現象的に明瞭であり、物自体的決定者は先の総体との並行性によってその性質が示唆されるだけである

マイノングにあっては、観念的な対象（常に、より高秩序の対象）は明確性という前景へと向かって行き、実在的对象は物自体という不明瞭な薄暗さの中へと落ち込んで行くことは興味深いことである。この為、マイノングは *Über die Erfahrungsgrundlagen (On the Empirical Foundations of Our Knowledge)* の終わりの方 (P. 93) で、実在的对象に性質を帰属させようとするときに、益々慎重になるのである。そこでは「対象Oはo（物の局面、物性という要素）と o'（外見へと現われる特性の総体）とに分割される。oは具体的知覚表象を与えることはないが、o'はそれを与える。ところが現象的決定者 o'は物自体的決定者 oと並行している。これについては次のことが明白である。o'間に通用するのと全く同じ比較関係が o間に通用するということである。このことの中には次のよう

な二つの要求が内包されている。既に充分証拠づけられていると取れる実体的要素 o は不自然で不可能な孤立の中では現実存在しないということ、及び、しかし現実存在者は諸特質を有している諸物から実際には成っているということである。」といった旨が主張されているのである。ようするに o' は現象的に明瞭であり、 o は物自体的に不明瞭でありその性質は o' との並行関係でしか示唆されていないのである。

Pp. 95-6.

- 18 マイノングの知識は、外的実在に関する知識であり、批判的知識である・上位者が認識の道具となり、下位者に証拠を与えるが、上位者自身に与えることはない・批判哲学の立場とは「現象によって物を知るのだが、現象と物が区別されると現象と物は分離し、注意点としての物を知ることは現象のみを知ることになる」ということである

以上のような知識は外的実在性に関する知識なのであるが、批判的知識でもある。上部者が認識の道具となっているのである。「外観」が、外観自体の為にではなく、対象（外観はそれらの外観である）の為に、証拠を供給するのであるが、外観は現象なのである。物は認識されているが、現象を通してのみ知られているのである。そうした現象は物への表示として現実存在しているのであり、それら自体の現実存在に対しては必ずしも証拠を与えることがないのである。エリオットは次のようなことが批判哲学の本質的立場であろうと述べる。「物はその諸現象を通して知られるのであるが、物と現象の区別がなされるや否や、現象と物とが分離してしまい、現象が注意点としての物に取って代るのである。」ということである。

P. 96.

- 19 批判哲学は下位対象と上位対象を区別する・それは「物」を対象性の局面ではなく、関係を持たない塊とする・観念的諸関係を実在的对象に依存する上位対象とすることは、それらの関係をカテゴリーとすることに通じる・何故なら、内部知覚は外部知覚よりも確実だからである・物自体は観念的对象に並行的に捉えられている・対象の決定は主観性を中心に行なわれる

下位対象と上位対象との区分は概して完全に批判的なものに思える。諸物を、対象性の諸局面ではなく、あらゆる関係が剥ぎ取られた後で把握される究極的な塊として取り扱うことが、マイノングやカントの試みのように思えるとエリオットは述べている。観念的な諸関係を、何故か実在的諸対象の上に築かれある意味合いでは実在的諸対象に依存した「上位の」諸対象として取り扱うこと*は、諸関係をカテゴリーとする第一歩であろう。何故なら、観念的諸関係は（マイノングのいう意味合いで）ア・プリオリであって、実在的なものよりも確実に認識できるのであって、「内部知覚」の対象は外部知覚の対象よりも確実に認識できるからである。マイノングは「観念的对象を取り扱うときには、主観性の影響がある。求める証拠が未だ確定していないときには、主観性が働いて、平等に選択しうる上部者の中から選択を行なうことになる。その一方で、本来的に限界のある知性は上部者の総量が如何程あるかを決定しかねているのである。この主観性は、われわれがア・プリオリに知ることの出来るもの一旦得てしまえば、そのものの正当性を決して危険にさらすことはない。従って、物自体は観念対象（上部者）に似てもおれば似ていないのもある**」といった旨を述べるのである。

Pp. 96-7.

*

Russell, 'Meinong's Theory of Complexes and Assumptions (I)', p. 207 ff.

**

Meinong, *Über die Erfahrungsgrundlagen unseres Wissens*, 99-100.

- 20 上部者と下部者の類似は推論の問題であり熟知されない・われわれは実在を本体ではなく内容が持つ関係において知っている・内容とは物への表示を持っており、関係はこの表示に関して知られる・マイノングの「非実在的観念的对象」の場合、「把握された現実の非実在的観念的对象」が「実在の非実在的観念的对象」となるという矛盾が生じる・この矛盾を避けるには、観念的对象と実在との間の適切性は、「観念の実在的内容」と「実在の複合体」の間にあらねばならぬことが解る・つまり、その適切性とは観念と実在との度合いを持った連関である・このことより次のことが解る：認識において、我々は関係の特異な事例を把握する。関係づけられた諸項からなる複合体は観念的ではなく実在的である。外観の物に対する関係は実在的關係である

このような上部者と下部者との類似の問題は、推理の問題であって、直接の熟知の問題ではないのである。われわれは実在を本体において知らないのであり、関係において知っているのである。われわれは内容の中の関係を知っているのであるが、但し、その関係をその物へと移したときに、その関係は偽りのものと成り得ないのである。何故なら、内容とは純粹にはその物への表示を持った内容であるからであり、関係は内容自体に関しては直接には知られていないからである。

適切性 *Adaquatheit*, つまり、観念の対象と実在との間にある観念の関係 (*Annahmen*, p. 263.) に関するマイノングの考え方は、完全に不明瞭である。非実在の観念的对象の場合、もし現実性 *Wirklichkeit* が実在的であるとするならば、現実に把握された観念的对象が実在的对象となってしまうのである。

つまり、観念的对象を把握するとき、「現実に」把握された観念的对象と「実在的」観念的对象との間にある適切性の関係とは「何」であるのかをエリオットは理解出来ないのである。何故なら、観念的对象と現実に把握された観念的对象の場合と、観念的对象と「実在的」観念的对象の場合との、二対の観念的对象があるはずがないからであり、もし、こうした二対があるのならば、「現実に」把握さ

れた観念的対象と「実在的」観念的対象との間にある観念的關係が同一の關係と成らざるを得なくなってしまうからである。

こうした矛盾から逃れるには、適切性とは、「観念の実在的内容」と「実在的複合体」との間に、あらねばならないのである。このことは次のようなことを意味するであろう。「認識においては、關係の特異な事例以外にはわれわれは關係を把握できないということ」、「關係づけられた諸項からなる複合体は観念的ではなく、実在的であるということ」、「外觀の物に対する關係は、常に実在的關係であるということ」である。

Pp. 97-8.

- 21 外的知覚（感覺的観念）とか内的知覚（反省）とかいったものは本来ないのであるが、前者から後者へと依存することは、不明瞭な「物」よりも確実なある關係への退却避難に過ぎない・内的知覚の方が外的知覚よりも証拠を多く持っているということはない・あらゆる知覚は対象を有し、その対象が実在的であるか否かは、特殊なコンテクストにおいて実践的に要求される「關係の数と種類」に依存している・内容を注意する「私」は内容を經驗していた「私」ではないから、内容は注意している自我の内容ではない・対象とされた内容は他の対象と同程度に確実であるに過ぎない・しかし内容（準一対象）より対象の方が確実とも思える

以上のような認識においては、われわれは、いつ迄も様々な關係へと溶解し続ける諸項を求めるといふ、正体の知れない鬼火を、追い求めているとも言えよう。

「内的知覚（私たちの心が自分を反省し、考えたり、疑ったり、意志したりするときに生じる思念、反省。）」に依存することは、物よりも確実なある關係へと退却避難する一例に過ぎない。前章での結論は「内的知覚」といったものは本来は無いのであり、それが想定された場合でも、「外的知覚（外界の事物がわれわれの感覺器官を刺激して、それが脳髓に達して生じる感覺的観念。）*」よりも確実な知

識を与えるといったことはないということであった。恐らくは、より少ない、より遅い知識しか与えないのである。記憶が感情の記憶であるにせよ、欲望の記憶であるにせよ、知覚の記憶であるにせよ、知覚の場合よりも記憶の場合の方が、より多くの証拠があたえられるといったこともないのである。主観から知覚の内容への移動（知覚から主観と対象とが生じるのだが、生じた主観から知覚を反省すること）は不確実なものから確実なものへの移動ではないのである。

何故ならば、既に了解したように、あらゆる知覚は対象を有しており、その対象が「実在的」であるのかないのかは、ある特殊なコンテクストにおいてわれわれが実践的な目的の為に要求する「関係の数と種類」とに、依存しているからである。実在とは約束事なのである。内容へと後戻りすることは、準一対象を主張することなのである。つまり、～であるかのような経験があったということなのである。内容で対象をこしらえることは、他のあらゆる対象と同程度に証拠不十分な物へと注意することなのである。対象化された内容とはそれ自体としては如何なるときにも経験されなかった物なのである。何故なら、内容に注意している「私」は、最初にその内容を経験していた「私」よりも、より広くより発展した私であるからである。従って、内容は如何なる意味合いにおいても（注意している）自我の一部ではないのであり、他のあらゆる対象と全く同じ証拠条件下にあるのである。すると、対象の証拠と内容の証拠とがあることになるだろうが、一方の証拠が他方の証拠に比べてより強固な証拠であるというわけではない。それでも大抵は、内容よりは対象の場合の方が証拠が強固であると（エリオットには）思える。

Pp. 98-9.

*

ロックは経験を二種類に分ける。センセーションとリフレクション（インターナル・センス）の二種である。これらが外的知覚と内的知覚と考えられる。

- 22 「対象と对象的」とは「実在的对象と観念的对象」、「上位対象と下位対象」といったように截然と区別できない・両者は相互内包的であり連続している

既に述べたように、実在を実在の諸対象や観念の諸対象へと引き寄せて四分分割することは矛盾なのである。このことを更に敷衍したいのであるが、このような分割には、「対象」という言葉が内包している（意味している）ものに関する混乱があるようである。実在的对象と観念的对象、下位対象と上位対象の区別は「真理と実在性の度合い」の考え方を無頓着に極めて大雑把に表したものに過ぎないようにも思える。ラッセルも渋々認めているように（‘Meinong’s Theory of Complexes and Assumptions (II)’ 352.），対象と对象的（実在的对象と観念的对象ないし上位対象と下位対象）とは、「黒板」と「その板の黒さ」とを比較すれば解るように、截然とは区別出来ないのである。そうであるなら、对象的として取り扱えない対象が一つたりとも有り得るのであるだろうか。又、対象として取り扱えない对象的が一つたりとも有り得るのであるだろうか。ラッセルが例として挙げるテーブルの知覚でさえ、ある種の諸経験が与えられているという主張として取り扱えるのである。つまり、そのテーブルは主張されている对象的が凝縮した外面という訳である。更に、マイノングが知覚とは現実存在へと至る判断(Existenzurteil)でもあるということを確認しているように、如何なる判断も判断をしているという知覚（判断が正しく行なわれているという知覚）を内包しているのである。

P. 99.

- 23 対象とは純粹には注意点である・しかし我々が生活しているときに会う諸対象は注意点以上である・我々が生活するこの場から物に関する総てのものが抽出されたのであり、それら総てのものは物を主観的世界ないし对象的世界に配置し得る・対象性とは对象的世界で注意点となる、乃至、注意点と考えられる可能性である・注意され得る多くの特質がその物の対象

性を構成するが、何れもその物の対象性にとって本質的であったり、対象という意味合いで対象的であったりしない・注意点が「何」になったとき注意点は「それ」になる・その物の「何性」が増大するにつれ、その物の「それ性」も増大する・物はその中で物が物ではないような存在へと入って行く可能性がある・物が物でなくなっても、持続する同一性がある・物が物でなくなったとき、その対象性は消滅したのではない・このとき物は物性ではない方法で存在しているが、物は物性によってのみ示される・存在は物性と同一ではないが、存在は物性という外観の下でのみある程度現象し得る・上位対象も下位対象も本来は無いのであり、これらは存在の二つの外面である・これらは観想されるときには両方とも対象であり、同じ秩序からなっている・仮にそうではないとするならば、上位対象をカテゴリーとし、下位対象のみを対象とし、實在の諸物のみが存在するとするが、仮説的限界たる物自体だけが実際には存在するとせざるを得なくなる・この点において、マイノングはカントに殆ど等しい

ここで対象の正確な定義を行なうならば、対象とは、それ自体としては（純粹には）注意の点なのであり、従って、われわれが注意を向けていると言われ得るものは総て対象なのである。

しかし、われわれが生活しているときに会える諸対象とはこうしたもの以上のものなのである。われわれが生活しているこの場から、我々は物に関する総てのものを抽出したのであり、それら総てのものは物を「主観的」世界ないし「对象的」世界の何れかに配置することが可能なのであろう。

対象性 objectivity という要素 element は、何らかのものが注意点となる可能性、ないし、何らかのものが注意点として考えられる可能性、のことである。しかし、その注意点とは純粹な抽象物なのである。その注意点が性質化される qualified ときにだけ、つまり「何 what」と成るときにだけ、その注意点は正に「それ a that」なのである。多くの特質がその物の対象性を構成しているにも拘らず（つまり、多くの要素が注意点と成り得たり考えられ得たりするのであるが）、それらの

特質の何れもその物の対象性にとって本質的ではないのであり、又、それらの特質の何れも、対象であるという意味合いにおいて対象的ではないのである。それにも拘らず、その物の「何性 whatness」が増大するのに正比例して、その物の「それ性 thatness」も増大するのである。

更に、物とは、実に物である為には、物がその中では物でないようなある種の存在へと入って行くことが可能であらねばならないのである。物が注意点であることを止めたときに、物は物であることを止めるということを、エリオットは言っているのではない。こうした見解は主観的観念論の視点に過ぎないのであり、エリオットはこうした問題の正当性を認めないのである。

物が物でなくなっても、持続している同一性があるのである。しかも、この同一性の為には、その対象性は消滅させられることはないが、無益化されるのである。物は存在しなくなるということはない。物は他の諸方法で、物性ではない方法で、存在するのである。しかし、物は物性によってだけ、表現されたり示されたりされ得るのである。

更に、これらの他の存在形式という潜在的可能性がないならば、その物は物ですらないであろう。つまり、存在 existence は物性 thinghood と同一ではないのである。世界は諸物から成り立っているのでもなければ、諸物と「他の諸物」から成立しているのでもない。しかし、存在は多少とも物性という外観の下で現象することが可能なのである。

以上のような考え方から生じてくる一つの結果は、厳密に低い秩序の諸対象もなければ、又、厳密に高い秩序の諸対象もないということなのである。マイノングが頭に描いているものは、存在の二つの外面なのであり、それらの外面は観想されるときには、両方とも対象なのである。しかし、それらが対象である限り、それらは同じ秩序から成っているのである。

仮にそうではないとするならば、低い方の対象のみが対象であり、高い方の対象はカテゴリーであるとし、「實在の」諸物のみが現実存在するとし、実際は實在の諸物は全くなくて仮説的限界たる物その物だけが存在すると、せざるを得なくなるのである。こうした視点から観れば、マイノングはもう一步でカントに至る

のである。

Pp. 99-100.

- 24 対象は時間的に現実存在し、普遍は無時間的に自存するという風に両者を截然と区別出来ない：マイノングは、低い秩序の下位対象は直接に知覚されると言うが、対象が意味を有す限り、対象は直接に知覚されない・意味は諸関係を、少なくとも同一性の関係を内包しているからである・この同一性によって、状況の多様性の中に観念活動の普遍性が保証される・現実存在者は自己を超越している・同一性は観念と実在との同一性であり、存在は現在の表象の中に与えられるが、物の存在は今を超えて過去へと延長して行く・上位者と下位者は分離不能であるから、一方の他方に対する論理的優先性はない・両者は対象性という同一局面が区分された二つの外面に過ぎない・両者とも、ある意味では、「われわれの知っている対象」ではない

ラッセルは Problems of Philosophy の第九章において、現実存在 existence と自存 Subsistence との二つのカテゴリーについて論じ、対象は時間の中に現実存在し、普遍は無時間的に存在する、即ち、自存する旨を論じている。ラッセルも示唆しているように、対象の全問題は時間の理論に密接に関連している。

マイノングは低い方の秩序を持った下部対象は直接に知覚され得ると考えているが、対象が意味を持つ限り、対象とは直接に知覚されるような対象ではない。何故なら、意味は諸関係を内包しているからである。少なくとも、同一性の関係を（われわれは必要としているのである。）内包しているのである。この同一性によって、状況の多様性の中に活動の普遍性が認識されるのである。

同一性に関しては、ブラドリは次のように述べている。「物が存在するには、物は同一性を所有せねばならない。ところが、同一性は実に疑わしい性質を有しているようだ。同一性が純粹に観念的ならば、物自体は殆ど実在的ではありえない。

……同一内容が所与の存在を超越するから、こうした同一内容が観念的と言われるのである。現実存在は表象の中にのみ与えられるのであるが、その一方では、物の現実存在が今を超えて過去の中へと延長して行くという条件でだけ、物は物なのである。(Appearance, pp. 61-2.)」

もし「あなた」が、上部者とは別に下部者が現実存在し、後者が前者とは別に知覚され得ると、主張しないのならば、上部者と下部者との区別は不可能であろう。だが、「あなた」が両者は分離不能であると一旦認めてしまえば、そうした全構造は崩壊するのである。何故なら、両者が分離不能のときには、一方の他方に対する論理的優先性がないばかりか、一方が現実存在するのに他方に完全に依存しているものだから、両者は対象性という同一局面が区分された二つの外面に過ぎないということになるからである。ある意味合いでは、上部者と下部者のどちらも「われわれが知っている対象」ではないとわれわれは言い得るのである。

Pp. 100-1.

- 15 「我々がよく知っている対象」は一つの外面に過ぎない・我々は他の諸外面にも対象という用語を使用せざるを得ない・対象についての考察は観念的諸要素を実在的諸要素から抽出することである・記述とは存在する要素ではなく自存する要素を際立たせることである・存在する要素は非—存在の要素との比較において選択されるということは、純粹に存在している要素は無いということである・存在者と自存者とを足し合わせても実在物からなる世界は出来ない・何故なら、完全に時間の中に存在するもの、純粹な「それ(ら) thats」は存在しないからである・合体的には一つの対象である諸対象の中で、一番対象的で単一な対象にさえ観念的諸要素があるということは、その対象とその観念的要素が具現されている他の諸対象との間には同一の観念的關係があるということである・ラッセルの時間と無時間との二元論はその諸要素が部分的には時間の中にあり、完全には時間の中にはない実在的世界には通用しない

しかし、「われわれが知っている対象」とはある外面に過ぎない。われわれは、一つ以上の外面に対して「対象」という同じ言葉を用いざるを得ないという困難に出会うのである。何故なら、対象についてほんの少しでも考えてみるということは、実在的諸要素と観念的諸要素とを区分することになるからである。如何なる記述も、現実存在するのではない自存する *subsist* 諸要素を、明確にせねばならないのである。つまり、ある諸要素が、他の現実存在しない諸要素との関連において、現実存在者として選択されるのである。要するに、如何なる要素もそれ自体では（孤立しては）純粹に現実存在していないのである。

「あなた」は、幾つもの現実存在者と幾つもの自存者とを足し合わせることによって、実在物からなる世界を得ることは出来ない。何故なら完全に時間の中に存在する物は何もない——純粹な「それ *thats*」は全く存在しない——からである。

如何なる対象も孤立した対象ではない。何故なら、諸対象（合体的には一つの対象である）の中で一番単一で一番对象的な対象の中に観念的諸要素が現前するということは、その対象と（その観念要素が具現されている）他のあらゆる諸対象との間にある関連があるということが意味されているからである。ある対象がそれ自体と純粹に同一であるということが、その対象とあらゆる他の諸対象との間の関係を構成しているのである。

従って、プラトーンに対する表面的な解釈である二世界論と殆ど同じであるラッセルの奇妙な時間と無時間との二元論（*The problems of Philosophy*, pp. 99-100.）は、その諸要素を考えてみれば、常に部分的には時間の中にはあるが如何なるときにも完全には時間の中にはない、世界には通用しないのである。

P. 101.

26 実践的必要性が実在の対象を構成する・注意の対象は実践的に要請された「一つの項」ないし「諸項の一つの複合体」と見做し得る・分析下の注意

の対象がどの時点まで同一対象であり続けるかは実践的問題である・何が時間の中で存続するかは「あなた」の管理する問題である・対象は、実践的要求に従い、又、その諸要素が実在的ないし観念的に扱われるのに応じて、変動する・諸項が諸関係へと分析されるときには、時間の中には時間自体以外には何も存在しないように思えるが、これは単なる実践的限界である

実在の対象を構成するものは、実践的必要性や実践的な時と場なのである。われわれは注意の対象を、時と場が要求する一つの項ないし一つの複合体として、取り扱い得るのである。そして注意の対象が、分析下にあつて、どの時点ないし地点まで同一の対象であり続けるかという問題は、実践的問題に過ぎないのである。何が時間の中で存続するのかという問題は、常に「あなた」が管理する問題であろう。普通は何の難しさもないのである。何故なら、対象は定められていないからである。つまり、時と場の要求に従って、又、対象の中の諸要素が実在的ないし観念的として取り扱われるに応じて、対象が変動するからである。しかし、諸項が諸関係へと分析されるときには、時間その物以外には時間の中に何物も存在しないように最終的には思えるのである。無論、こうした視点は単なる限界であり、決して達成されることはないのである。

Pp. 101-2.

- 27 純粹に観念的な対象と純粹に実在的な対象との区分は志向による実践的区分であつて、絶対的分離は成立しない：両者は実在の志向される二つの外面であるが、互いから独立して把握されることはない・又、両者は本来的には類の異なる対象同士ではあり得ない・もしそれらが対象同士なら、それらは同じ種となり、それらの「違い」は对象的範囲を超えてしまう・例えば「違い」という関係（観念）を対象とする限り、関係は関係でなく、対象としての関係である・我々は対象としての「違いという関係」におい

て、存在的傾向を持つ関係（諸項間の関係：「緑—から—違う—赤」）と自存的傾向を持つ関係（再度関係付けられた諸項からなる複合体：「赤—と—緑 の—違い」）とを相対的に区分する・存在と自存は絶対的に分離しているということはない・孤立した存在と自存とは何れも実在的ではない・対象を志向するという活動において志向されているものは実在的な何物かである

「実在的」対象の「現実存在」はこれくらいにして、次に純粹に観念的な対象についての検討に入る。同一性とか相違性といった関係や純粹数学の対象といったもののことである。

こうした対象についても、エリオットは異議を提示する。つまり、われわれが実在の対象を志向するのと全く同じように、われわれは観念的对象を志向するのであって、実践的にのみ志向の違いが実在の違いとなるのである。ところが論理的には（それらの第一原理の批判的検証を行なうならば）、純粹に実在的な対象と純粹に観念的な対象との区別は絶対的には成立しないのである。エリオットの異議申し立ては次のようである。

現実存在者（existent 時間内存在者）と自存者（subsistent 無時間的存在者）とは、実在の志向される二つの外面ではあるが、如何なるときにも、現実に把握されることはないのである。しかも、それら二者の違いは二クラスの対象の間にある違いではないのである。何故なら、もしそれら二者が対象であるとするならば、それらは同一の種類 the same sort となってしまう、それらの違いは対象的な範囲の外にあることになるからである。

例えば、われわれが「違い」という関係を対象にするときには、われわれは「何」に注意をするのであろうか。違いという関係が対象である限り、それは関係ではないのであり、それは対象世界の中にあるその関係に対応する何物かなのである。つまり、それは分離した二つの存在者の対応ではなく、同一平面上のものなのである。従って、この対象は現実存在する対象が持っているあらゆる困難を逆の順番で受け取るのである。

この対象は、関係としては、諸項間の関係なのである。この対象は、対象としては、差異という〔単一の項〕でもあれば〔再度関係付けられた諸項からなる複合体〕でもあるのである。関係は関係自体の場合には把握されるとか、違いという関係は「赤と緑」という特殊内容の違いを通して把握されるとか、言っても仕様がなないのである。何故なら、このように述べることは次のようなことを認めるに等しいからである。即ち、真の対象は (a) 「緑―から―異なる―赤」であるとか、真の対象は (b) 「赤―から―緑 の―差異」である、ということ認めることになるのである。

(a)と(b)とは、ある意味合いでは、同一の対象なのであり、別の意味合いでは、異なった対象なのである。実践的な注意は同じ方向に注がれているが、強調点が異なるのである。両対象は絶対に同じであるとは言えないのである。われわれがそれらを同じものと見做す限りにおいて、(a)は存在の方向を示すのであり、(b)は自存(本質存在、無時間的存在)の方向を示すと言えるのである。しかし、「赤―と―緑」(現実存在)が一方にあり、それと分離して他方に「違い」(自存)あるということは、如何なるときも現実化されることはないであろう。

こうした結論に到達する為には、違いは違っていないとか、白は白くないとかいう抗議に反論する必要はないのである。何故なら、自存とか現実存在の何れも実在的では有り得ないということ、及び、対象を注意するという活動において志向されているものは常に実在的な何物かであるということ、をわれわれは意味しているからである。

Pp. 102-3.

- 28 対象とされた関係は関係自体ではなく対象であった・つまり、実在の対象の中で自存者に注意するとき、自存者はそれ自体では注意の対象ではなく、その存在の方が注意の対象である・この個としての存在こそ、一つの対象がある限りでのその対象である・自存者は実在者以上(それから独立した存在を持つ)のものであり、以下(自存面に限定されている)のものであ

る・自存者は存在の制約下にあるから、それ自体以下でもある

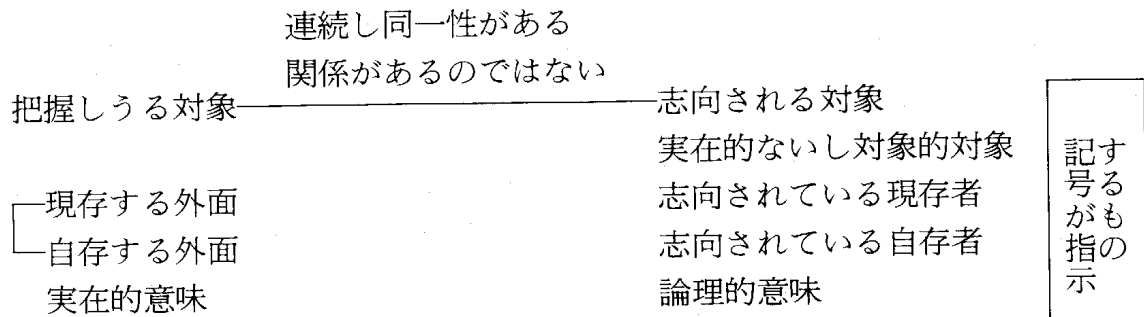
対象としての関係は関係ではなく、対象であるということは、実在の対象から上位の自存者を抽象するとき、自存者はそれ自体では、決して注意の対象ではないということである。自存者は個 individual としての存在を所有しているのである。無論、自存者がそこより抽象されてくるものから自存者は独立していないのではある。そして、この個としての存在こそが、一つの対象がある限りでのその対象なのである。

もし、最初の経験の中にある実在の対象Aが与えられ、そのAよりわれわれが上位の観念的对象aを抽象するとするならば、aは同時にA以上のものでありA以下のものとなるのである。aはAの純粹に自存的外面であることを志向されているという点において、aはA以下なのである。aはAから大いに独立した状況を持ったそれ自体の現実存在者を持っているという点において、aはA以上なのである。更に以上のように、aは自存者であるから現実存在の状況によっても亦限定されているという点において、aはある意味合いにおいて又それ自体以下なのである。

以上のことから、記号と記号の指示するものとの関係が次の問題となるのである。

P. 103.

29 ブラドリの記号ではない、本来の記号は以下のように考えられる



自存者を記号指示する語を使用するとき、注意の現実的对象は流動的で不定である・抽象的な用語を使用するとき、論理的意味は実在的意味から区分される・我々は志向される対象（論理的意味）の代わりに現在する記号を使用する・しかし、記号と記号の指示物との間は連続しているのであり、関係があるのでは決してない・記号がなければ志向される実在は認識されず、記号は実在の証拠となっている・例えば、「関係」という語には、単語という〔存在〕と実在の関係（関係という意味）という〔自存〕とが一体となっている・この実在的意味を持つ語によって、対象とされる論理的意味は記号指示される・つまり、語が無ければ意味は無い・又、意味が無ければ語もない・語と意味とは分離して別々の対象にすることが出来ない・記号が使用されるとき、単語だけを、論理上の意味だけを、単語と意味の合体者を、対象とすることは出来ない・何故なら単語と意味とは連続しているものであり、連続は対象ではないのであって、それらを合体させることは出来ないからである

第二章で見たように、ブラドリの考える「印し（記号）」は、「現実存在と内容とを持っており、意味と共に用いられるものであり、意味は精神によって切断され固定された、現実存在から分離した内容から成る」のであった。つまるところ、現実存在と内容とは分離していたのである。エリオットは此処で記号の本来の姿について考察する。

エリオットが記号 symbol と呼ぶものは、パース Peirce が *Collected Papers*, Vol. II, Book II, Chapter 3, 'The Icon, Index, and Symbol,' 156-73. において、記号 symbol, とアイコン icon と呼ぶ両者のことであり、指標 index は除くものである。パースにおいては、記号、アイコン、インデクスは次の如くである。記号とは、記号それ自体と指示対象の関連における、合意された内容を持つ法則記号である。アイコンとは、記号それ自体と指示対象の関連における、対象の幾つかの性質を持つ性質記号である。インデクスとは、記号それ自体と指示対象との力動的関連において、それ自体は何も表さないが注意を引く記号である。

エリオットは記号を次のようなものとして意味している。つまり、記号を、一つの連続体の実在的（もっと正確には対象的）な端として意味しているのである。この連続体は、一方の端においては、「志向されている現実存在者」ないし「志向されている自存者」で終わっているのであり、他方の端においては、（把握し得る）対象で終わっているのである。そして、この対象の方も現実存在する外面と自存する外面との両者を持っているのである。

さて、抽象物を記号表示する語を使用するときには如何なるときも、現実の注意対象は非常に変動的で不定のものであるとエリオットは述べる。即ち、様々のコンテキストの中に一つの決定された対象があるだけではなく、その対象はコンテキストとの関係で変動するものでもあるのである。

このような訳で、抽象的な用語を使用するときにはいつでも、志向される対象である「論理的意味」と経験の一部であり実在の対象や志向される対象ではない「実在的な意味」とをわれわれは区分出来るのである。われわれは常に、何らかの程度において、現在する記号を志向される対象の代りに使用するのである。

しかし、正確に言えば、記号と記号が表示するものとの間には関係が全くない、何故なら両者は連続しているからである、という点が強調されねばならない。記号なき実在は如何なるときにも知られることはないであろう。そうしたものは現実存在するであろうとか（存立するであろうとか）すら、われわれは言えないのである。しかし、その一方では、記号は実在の証拠を提供するのである。何故な

ら、実在がないならば、記号はその記号ではないであろうからだ。つまり、われわれの実践的目的にとっては不適切な同一性が残されるのであろう。

「関係」という語は、「関係」という実在を持たない「関係」という語ではないのである。そして、この「関係」という実在は、それ自体においては、対象ではないのである。如何なる語も、意味なしでは、現実存在しないのである。もし、「関係」という語が、「関係」という意味を持っていなかったならば、その語はそれとは別の意味を持っていないからではないのである。「あなた」はこの語とその意味という、二つの別々の実在を決定することは出来ないのである。つまり、語（ここでは現実存在者）は意味（ここでは存立者）に連続しているのである。

語だけが対象なのではない(孤立した語といったものはないからである)。論理的な意味も対象ではない(論理の意味とは抽象物であり、語がなければ把握できないからである)。語と意味を足し合わせたものも対象ではない(足し合わせたものは存在しないのであり、語と意味は連続しているのである。そして、連続者は対象ではないからである)。

エリオットは注において、ラッセルが *Problems*, pp. 58-9. において「言葉に付与する意味は熟知されたものでなければならぬとか、言説は、それが意味したり表現したりしているように思えるもの(無意味な雑音に過ぎない)を意味していないのであり、われわれが熟知している特称者(ロックのいう内的感覚と外的感覚の与件)や普遍者でもって完全に構成される記述を含む何物かを意味する」旨を述べた個所を引用し、その中の、特称者が熟知されるものであるとの考え方に、特に反論している。その理由は次に述べられている。

Pp. 103-4.

- 30 孤立した純粋な普遍者やそのような個別者やそれらの合体者は真の対象ではない・普遍者と個別者とは連続しているのであるから、明確に関係付けることは出来ない・しかしマイノングは両者を純粋な対象として熟知し、ラッセルは両者を対象とされた表象として熟知する・普遍者も個別者も純

粹な対象として熟知されないし、対象とされた表象としても熟知されない・特に、個別者（感覚与件）と自我とは対象とされた表象として熟知するのではない・我々は、感覚与件を対象にするずっと以前に、対象の実践的把握において感覚与件や自我を何故か熟知しているのである

以上の理由から、(真の)対象とは、孤立し純粋な普遍者でもなければ、そうした特称者でもないし、普遍者と特称者からなる複合体でもない。

普遍者と特称者は分離した現実存在者同士ではないのであるから、両者は明瞭なる意味合いにおいては関係付けられないということを、プラトーンはよく知っていたとエリオットは思っている。

従って、エリオットはラッセルの説にもマイノングの説にも満足しないのである。何故なら、ラッセルもマイノングも、普遍者や特称者は直接の熟知によって知られ得るとするからである。しかし、マイノングは両者を純粋な対象として取り扱っているようであるが、ラッセルの熟知は対象に対する知識とは別の種類の知識を確かに表示しているのである。

彼は 'Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description.' *Proceedings of the Aristotelian Society* New Series X I (1910-1911) 108-28. において、熟知を「それという対象への直接的認識的關係……」として定義している。この認識的關係とは表象の直知ことである。感覚与件や普遍者や恐らくは自己 self も表象として熟知されるのである。

しかし、普遍者について仮令いかなることが述べられるにせよ、感覚与件も自己も、普通は表象と呼ばれるもの、即ち、対象とされた表象、によって原初的に知られるのではないのである。何故なら、われわれが感覚与件自体を対象(表象)とするよりもずっと以前に、われわれが対象を実践的に把握する際には、成るほどわれわれは感覚与件や自己をどういふ訳か対象ならぬ状態で「熟知」してしまっているのである。

- 31 マイノングにとっては、実在的なものは総て対象であるから、彼には実在性の度合いがない・ラッセルは感覚与件（感覚的に経験されるもの：ロックの言う、外的感覚の与件と内的感覚の与件）と普遍者で外的世界を構築するが、個別存在者と自存者とを足し合わせても実在の対象は構成されない・ラッセルにあっては、対象は記述されるのであり、熟知されるのではなく、経験の感じられた全体性においてのみそのものが熟知される・ラッセルの記述においては、以上のように個別者と論理的普遍者との足し合わせがあり、両者は感覚的与件とカテゴリーとに相等すると取れ、カント主義が同われる：つまり、対象は我々の認識範囲を超え、我々が熟知しているのは対象ではなく、カテゴリーなのである。対象などというものは無く、経験のみが存在する。地名でさえ、我々が熟知している一、二の個別者が適用される記述を含む。ところが、存在するものだけでなく存在しうるものに我々が関与する論理においては、現実の個別者への表示は含まれない。対象を知るということは、存在を主張する一つの对象的に過ぎない「その」対象を熟知することになる。つまり、感覚与件とカテゴリーとが完全に分離するのである

マイノングの理論は対象の実在性を前提として出発する。実在的なものは総て対象なのである。即ち、実在性の度合いが全く考慮されていないのである。

ラッセルは普遍者と感覚与件の実在性から出発する。そして、知識の秩序や順序において遅く生じてくるこれらの普遍者と感覚与件から、ラッセルは外的世界を構築するのである。 *Problems*, pp. 51-2. において、彼はロックを思わせる次のような旨を述べている。「我々は、感覚において、外的諸感覚の与件を熟知する。内省においては、内的感覚——思考、感情、欲望——の与件を熟知するのである。我々は、現実存在する特称者の熟知に加えて、普遍者——白さ、相違、親交——といった一般観念を熟知する」。しかし、現実存在者と自存者とを足し合わせても、実在は構成できないのであった。

同書 P. 52. において、「我々は自然な対象を熟知しない」旨が述べられている限り、われわれは「対象」の性格をした如何なるものをも熟知することがなく、経験の感じられた全体性においてのみ、そのものを熟知しているということが推論されるのである。

ラッセルのこの旨からすれば、次のような面白い結果が生じるのである。先ず、対象は直知されているのではなく、推論されているという結果である。次に、名称を与えられるものは総て、その限りでは、われわれが熟知していないという結果である。

これらの結果の中には、実在論のカント主義への面白い和解策があると取れるのである。われわれが熟知によって知っている存在者が、対象ではなくて、対象を把握する手段なのであり、その一方で、対象はわれわれの認識の範囲を完全に超えているとされているのである。こうした解釈に従えば、対象などといったものは全くないのであって、諸経験のみが存在するのである。 *Problems*, P. 56. には「ロンドン、英国、地球、太陽系といった地名でさえ、われわれが熟知している一つないし幾つかの特称者から出発する記述を含んでおり、形而上学における宇宙ですらそうした特称者との連関を含む。ところが、論理（論理において我々は現実存在するもののみでなく、可能的に現実存在したり存在するものにも関与する）においては、現実的特称者への表示は全く含まれない。」旨が述べられているのである。つまり、ここには、感覚的に経験されるものとカテゴリーとが存在するのである。更に、同頁において、記述によってのみ知られている何物かについて言明する際には、われわれは「対象」自体に関して言明しようとする志向ししようが、我々は如何なるときにもそのようには志向しない旨が述べられている。

以上のような考え方にあつては、対象を知るということは、その対象があることを知ることに過ぎない。われわれは現実存在を主張する孤立した一つの対象的を知っているだけなのである。その対象的を熟知していると述べることは、対象を更に実在的にすることではないのである。

- 32 他者は志向される対象でもあるが、彼は自分を熟知している・従って、世界は生理学的体系と論理的体系とに結びついた記述という観念的構築体として現象する・ラッセルは直知（観想）を熟知（享受）と混同することがある

他者は志向される対象でもあるが、彼は彼にとってのみ実在の対象でありうる。しかも彼は彼自身にとっては対象ではないのである。何故ならば、人は自分自身を直接に熟知しているからであり、熟知とは主観—対象の関係ではないからである。こうしたところから、世界は、生理学的体系と論理的体系に結び付いた記述によって観念的に構成されるものとして現われるのである。

エリオットは注において、ラッセルは先の論文において「それという対象への直接的認識関係」が熟知であるとしているが、先の論文と *Problems* とにおける熟知に関する説明によれば、熟知とは観想ではなく享受を指示しているように思える。ラッセルの立場には様々な不分明な点があるが、そのうちの一つは、対象であろうと意味されていないものを同時に対象として取り扱っていることにあり、と述べている。つまり、熟知とは享受であるから対象を観想することではないのに対象とされた表象を直知することとラッセルは取っているというのである。

P. 106.

- 33 ラッセルは、感覚与件のある種の空間化によって、物の実在性を得るが、これはバークリヤカントと同じである・彼らの場合、対象物は論理的構築物であり、普遍者と感覚与件との二種類の異なった質料からなる・つまり、純粹に存在するものは感覚与件となり、純粹に自存するものは普遍者となるのであり、それらを質料とする論理的構築物が対象となる・従って、対象は存在するものでもあり、自存するものでもあり、両者の合成物でもありとも言うマイノングの場合は、純粹な存在者や純粹な自存者が無くなっ

てしまう・この点においてラッセルやカントの場合と違いがある

対象世界の中にある普遍者と特称者の関係はどのようなものであろうか。‘On the Relations of Universals and Particulars’ (*Ibid.*) において、ラッセルは「日常的な物は、様々な感覚に所属する感覚可能な特質の束によって構成されるが、空間という一つの連続的な部分の中に総て共存すると想定される、」と述べている。（それら自体は対象ならぬとされる）感覚与件のある種の対象化（空間化）によって、われわれは物の実在性（ないし幻影）を得るのである。

このような日常物に対する考え方は、ラッセルのバークリ解釈と言うよりもバークリそのものなのである。例えば、ラッセルは同書 p.7 において、「一なる空間について語る とするならば、知覚された感覚与件の代りに、そうした局面の科学が規定する何らかの特質を所有する断片的質料の集合を、使用するのである」と述べ、バークリも *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*, XLIV において、「視覚の観念と触覚の観念とは完全に異なった異質の二種である」と述べており、空間に納まる観念（視覚の観念）の重視において、両者は同じなのである。

しかし、こうした日常物に関する考えは、視点をすこし変えれば、カントそのものなのである。「あなた」が論理によって結合された感覚与件を所有しているところ、ところが、こうした多様の決定は、主観の為になされるのである。何故なら、感覚与件は熟知においてのみ実在的であり、熟知は主観による享受を意味するからである。しかし又、享受している主観は、感覚与件を論理でもって結合することは出来ないのである。そうした感覚は享受されているのではなく、ある意味合いで空間化されているからである。論理によって結合された感覚与件を所有しているのは主観ではなく「あなた」なのである。高い秩序を持った対象である（ラッセルにとっては低い秩序の対象は本来存在しない）物は、論理的構築物なのであり、感覚与件と普遍者という二種類の質料から成るのである。感覚与件と普遍者は、ある意味合いでは対象的ではあるが、論理的構築物としての対象と同じ意味合いでは対象的ではないのである。

ラッセルの理論を以上のようにカント的に解釈し、それに基づくならば、マイノングと共に対象とは現実存在者でもあり自存者でもあるとか、それら双方の材料の合成物でもあると述べることは出来なくなるのである。何故なら、ラッセルやカントの場合、純粋な現実存在者としての存在者は感覚と内省によって与えられる存在者であり、純粋な自存者としての存在者は普遍者であるからである。つまり、マイノングの場合は、それらの何れも対象であるから、純粋な現実存在者や純粋な自存者ではあり得なくなるのである。

Pp. 106-7.

- 34 あらゆる存在者を無条件に対象であるとすると、対象が存在する為の証拠が殆ど無くなる・熟知されるものは真でも偽でもない・感覚与件や反省や普遍者も熟知される限り対象ではなく、対象とされる限り外的知覚の全条件に従う・普遍者も真でもなければ偽でもない・何故なら存在命題なしには偽を得ることはないからである

対象を無条件に想定し、この理論に基づいて開始するときには、対象の存在の証拠が非常に不確定なものとなる。われわれが熟知によって知っている物は総て「真でもなければ偽でもない」のである。つまり、感覚与件や普遍者や内的に知覚される対象のことである。これらの物は、熟知によって知られている限りでは、対象ではないのである。それらが対象である限り、それらは外的知覚の全条件に従うのである。普遍者も亦、確かに真でもなければ偽でもない。何故なら、「あなた」は存在命題なしには偽を得ることはないからである。

Pp. 107-8.

- 35 我々は普遍者や個別者を経験するが、経験は知識ではない・知識とは対象に関する知識であり、対象の中では、普遍者と個別者とは要素となってい

る・数学的对象でさえ存在的要素と存立的要素から成っており、実践的コンテキストに応じて一方の対象に決定される・純粋な自存者として考えられた数は、真との結合や偽との結合を持たず、観想において経験されているだけである・対象において考えられた数は、そうした結合を持ち、我々は熟知によってその結合を経験する・数は対象でもなければカテゴリーでもなく、対象の自存的要素なのである

白さも親交も、マイノングの言う意味合いで*、又究極的にはカントの意味合いで、ア・プリアリである。しかし、それらは知識でもなければ知られることもない。われわれは普遍者を経験し、特称者を経験するのであるが、知識とは常に対象に関する知識なのであり、対象の中で普遍者と特称者とは要素と成っているのである。

こうしたことは、他の対象は無論のこと数学の対象にも、当て嵌まるのである。現実の数学的对象は現実存在的要素と自存的要素とから構成されるのであり、それが使用される傾向性によって、現実存在的対象であるとか自存的対象であるとかいった風に実践的に定義されるのである。

純粋な自存者として考えられた数は、真の結合ないし偽の結合を持たないのである。何故なら、そうした数は知られていないからである。そうした数は、それらが当て嵌まる対象の観想においてただ経験されているだけなのである。 $2 + 2 = 4$ とは、真でもなければ偽でもないのである。しかし、われわれが四つの実在の対象を足し合わせるときには、われわれは二つの対象と二つの対象とが四つの対象になるということを、対象の状態において知っているのである。そしてわれわれは $2 + 2 = 4$ であることを熟知によって経験するのである。

無論、われわれは数だけを抽出し、残った対象性の局面でもって数を決定できるのである。しかし、このときにわれわれが経験しているものは、数自体ではないのであり、数に対応一致している対象なのである。何故なら、数が対象に当て嵌まるように、対象が対象に当て嵌まるということはないからである。数は対象ではない。数は厳密にはカテゴリーでもないのである。

*

マイノングにおいては「白さは白い」といった同語反復はア・プリオリな証拠付けである。

P. 108.

- 36 ラッセルの知識は機能的概念であり、現象は知り得るが本質や物自体は知り得ないことになる・そして、対象は諸現象の（機械的ではない機能的な）結合、関係、連関によって記述されるということになる・この本質と現象の二元論的实在論は「われわれの知識の外に実在的世界があると想定し、どうすればわれわれがそうした実在を知り得るのかと尋ねる」認識論的発想から生じる

ラッセルの哲学の視点から生じる問題は、实在でも非一实在でもない諸存在者の熟知から真ないし偽の实在的对象に関する知識へとどの様にして至るのか、ということである。「自然の対象は我々の感覚与件に似ているはずがないのではあるが、我々の感覚を引き起こすと考え得ると我々は暫定的に同意した(*Problems*, p. 30)」。空間とは一つの想定である (*ibid.*, pp. 30,31)。時間は前後の順序からなるが、出来事が持っていると思われる時間の順序は、出来事が真に持っている時間の順序と同一であるということ、われわれは確認できない(*ibid.*, p. 32)。第二性質は自然の対象の性質ではない (*ibid.*, p. 35) が、赤と青の経験においては、対象における差異は赤と青の差異に一致しようと、われわれは「理に適った想定をする (*ibid.*, p.34)」ことが出来る。「自然の対象の関係は、感覚与件の関係との対応一致から得られるあらゆる種類の認識可能な属性を持っているにも拘らず、その自然の対象自体は、少なくとも諸感覚という手段によって発見される限り、本来の性質においては知られないままなのである (*ibid.*, p. 34)。」

以上の考え方は「物自体、本質、原因、実体についての認識は不可能であり、

現象、結果、属性についての認識のみが可能であるという不可知論的実証主義ないし現象主義たる」機能的概念 (Funktionsbegriff, functional conception) に非常に接近しているのである。この考えは、諸現象の結合、関係、連関によって対象を記述するのであるが、そうした結合、関係、連関は機械的ではなく活動的で機能的であるとするのである。

物が以上のような諸関係から成る一機能以上のものであるとするならば、物とは一般受けのする偏見をそのまま想定したものとなるのである。以上のような本質と現象の二元論的実在論の持つ困難は「われわれの知識の外側に一つの実在的世界があると想定し、どうすればわれわれがその世界を知り得るのかと尋ねる」観点、即ち、認識論的観点から生じるのである。

Pp. 108-9.

- 37 対象が熟知される普遍者と個別者から成るある種の空間化であるならば、対象は時間の中と外との何れにあるのか？・普遍者に関する知識は時間の外にあるが、ある物への注意は時間の経過を辿り、その物は時間の中に存続する・しかし、存在している対象が完全に時間の中にあるならば、注意の時間的存続は共通の意味の同一表示による感覚の諸局面の束握を伴うが、その意味は時間の中にある・こうした矛盾から逃れる方法は、自存者と存在者とは相関的であるということと、実在の対象は存在的要素と存立的要素を常に持っていることを主張することである・しかし、個別者を普遍者とは別に把握しようとするならば、個別者とその時間をどう一致させるのか、個別者を普遍者からどう分離するのか、という解決不能の問題が生じる・時間とは空間と同様に現象である

ラッセル哲学の視点から生じるもう一つの難点は、知識における時間と実在における時間の問題である。

万一普遍者が対象であるとするならば、普遍者に関する知識は、時間の中には

無い対象に関する知識となるであろう。従って、知識は時間の外にあることになるろう。

ところが、われわれはある物に注意するのであり、われわれの注意が時間の経過を辿るのならば、対象は必ずや時間の中に存続するのである。

しかし又、現実存在している対象が完全に時間の中にあるのならば、対象に対する注意の存続自体が、共通の意味によって感覚の様々な局面を一つに束ねるといふことに通じるのである。そして、その意味はそれが表示している時間の中には存在しないであろう。

エリオットは、存立者と現実存在者との相関性を主張することによって、又、実在の対象は現実存在する要素と存立する要素とを常に持っているという事実を指摘することによって、以上のような時間のディレンマから逃れる手立てを何とか示そうとしたのである。

もし対象が熟知によって知られる普遍者と特称者からなるある種の空間化であるならば、こうした一つの視点からラッセルが最終的に得てくるものは以上のような時間のディレンマなのである。

しかし、これらの合成的存在者を把握するときには、更に困難な問題が生じるのである。つまり、ブラドリの言う「空間の場合と同様に、純粋に時間的ではなくて、そこから離れれば関係付けられた諸項が何の性質も持たないような、性質的内容は、解決不能の問題を提示するのである。[これ]を[これ]が占めている時間とどの様にすれば統一しうるのか。又、それぞれの外面をどの様にすれば正しく分離出来るのか。これらの問題はわれわれの方策を超えているのである。従って時間もこの限りにおいては空間と同様に現象に過ぎないと解るのである。

(*Appearance*, p. 34)」という問題が生じるのである。

Pp. 109-110.

38 知覚することと知覚されることが同時で、対象が時間の中にある感覚と時間の中になく普遍者から構成されるなら、対象が存在する時間とは

何か・感覚与件の時間秩序と対象の時間秩序とが異なるならば、互いへと還元できない二つの時間秩序があるか、感覚与件から対象自体へと至る様々な時間秩序が連続していることとなる・実在は知覚の対象と対象自体との間を移動する・知覚の対象は不可能な限界である：時間の中にあるものは存在しない、存在するには時間の中にあるものは「何」でなければならない、「何」の観念的關係は時間の中にある・対象自体も不可能な限界である：知覚の対象が「それ」という無時間的对象自体と矛盾する。対象が変化する限りその対象は「それ」という無時間的最終対象ではない・時間の秩序は何を対象と取るかによって（知覚される物を対象とするか、「実在」のものを対象とするかによって）変動する・「実在」の対象と知覚の対象とは、異なった關係に置かれた同一の感覚与件である・これら二つの対象が同時に存在するという事は同一の観念的關係による結合を意味する・両者がそれへと表示させられる単一世界の中で両者は宥和されている・両者の「同一表示」を感じる事によって両者は束ねられる・両者が表示するものは存在しない・この世の様々な対象も、我々がそれらを単一の世界へと同一表示したときに意味を持つのである・その世界の中で我々が漠然と感じていることは、それらは経験によって宥和されているということである

知覚することと知覚されることとが同時であるということに何か意味があるのだろうか。「私」が対象を知覚するとき、対象が「そこに」と同時に私の知覚が「そこに」と言明することには、何らかの意味があるのだろうか。

われわれが以上のような主張を行ない、そして、対象は厳密に時間の中にある感覚与件と時間の中にはない普遍者（關係）から構成されるということ、認めるならば、われわれは次のような問題に直面する。即ち「対象は如何なる時間の中に現実存在するのか」である。

ラッセルは「様々な自然な対象が持っている様々な状態は、それぞれの対象のそれぞれの知覚を構成するそれぞれの感覚与件と同じ時間秩序を持っていると、想定してはならない。（*Problems*, p. 33）」と述べている。

そうであるならば、お互いへと還元できない二つの時間—秩序があるということになるか、感覚与件という経験の直接秩序から対象自体へと、様々な時間—秩序が連続しているという可能性があるか（対象自体が「それ」という対象である限り、対象は時間の中に全くないということになる）、の何れかということになるのである。従って、実在は、次の二つの不可能な限界（知覚の対象と対象自体）の間で動揺するように思えるのである。

何故それらの限界が不可能なのかと言え、一方の限界（知覚の対象）においては、純粹に時間の中にあるものは、現実存在するとは全く言えないからである。現実存在する為には、時間の中にあるものは、「何」であらねばならない。そして、「何」であるということは、他の諸「何」に対して（内的）観念的諸関係を持つ、即ち、時間の中にない諸関係を持つ、ということだからである。

又、その一方の限界（対象自体）においては、知覚としての対象が、対象としてのそれ自体と、矛盾しているからである。何故なら、対象自体が「それ」という対象である限り、それは無時間的であり、それが変化する限り、それは如何なるときにも「それ」という対象ではなかったからであって、それは自らの二つの状態の間を持続し得る前の方の対象であったということだからである。つまり、完全に実在的な（最後の）対象は時間から独立しているのであり、何らかの変化があったと気付いた後では、その実在的对象が以前にそうであったものは現象と見做し得るからである。

すると、時間の秩序は、われわれが何を対象と取るかに応じて、変わるということになるのである。例えば「実在の」太陽を対象とするのか、知覚された太陽を対象とするのかで、時間の秩序が変わるのである。これら二つの太陽は異なった関係の中に置かれた同一の感覚与件なのである。これら二つの対象が同時に現実存在するということは、同一の観念的關係による結合を意味しているのである。私の性格と十時の汽車とが、ハーバードウ・スペンサーの名声と私のテーブルに乗っている彼の本とが、私のテーブルと電子とが、同時に現実存在するということは、何を意味するのであろうか。正確な意味は全く無いのである。このような言明は、われわれがそれら両者を単一の世界へと表示させる限りにおいて、意味

を持つのである。そして、その世界の中でわれわれが漠然と感じていることは、それら両者は経験によって宥和されているということなのである。つまり、両者の「同一表示」を感じることによって、両者は束ねられるのである。尤も、両者が表示するものは現実存在しないのではあるが。

Pp. 110-111.

- 39 知覚はそれが対応せねばならぬ時間の中にはない・幾つもの時間—秩序がある・一つの時間秩序だけが実在的であり、それに対応せねばならぬ知覚の秩序が別にあるとの想定が矛盾を生む・二元論的実在論における実在の時間も実在の空間も現象に過ぎない・二元論的実在論は批判主義に通じる：批判主義とは実在の世界の想定の後でその世界の認識を問題とし、直接経験のある種の与件と形式のみから自然な世界を構築する。外的（自然な）世界の「対象性」は実践性もなければ意味もなくなる

次のような説明が、知覚が持っている時間的困難から抜け出す唯一方法（エリオットの発見しうる）なのである。つまり、時間の困難は全くないということである。何故なら知覚は、（それが対応せねばならぬ）時間の中にはないのであって、幾つもの時間—秩序があるということなのである。

それらの中の一つの時間秩序だけが実在的であり、その時間秩序に何故か対応一致せねばならない知覚の秩序が別にあると、われわれが勝つてに想定するときのみ、矛盾が生じるのである。

二元論的実在論においては、時間が持つ困難は実に深刻なものとなり、実在の時間は実在の空間と同様に単なる推論に過ぎないように思える。

われわれはこの二元論的実在論において又、批判主義に大いに接近するのではなからうか。何故なら、実在の時間と実在の空間とは、問題が次のように設定されるときにのみ、要求されるからである。即ち、実在の（自然な）世界が想定され、その後でわれわれがこの世界をどの様にして知ることかという風に設定

されるときなのである。このときにわれわれが確信しているものは、直接経験のある種の与件と形式のみに思えるのである。そしてそれらのものから自然な世界は構築されるのである。そして、こうした世界の構築の結果、外的世界の「対象性」は実践的な目的を持たなくなるか無意味となるのである。

P. 111.